

『資本論』第Ⅱ部の成立と新メガ  
エンゲルス編集原稿(1884 - 1885・未公表)を中心に  
早坂啓造 著  
東北大学出版会 2004年

小 黒 正 夫

I  
本書は明らかに新MEGAの編集作業に携わる日本における作業グループの一つであるいわゆる仙台グループの共同研究・作業の中から生まれた研究業績である。

服部文男が早くにマルクス－エンゲルス研究の新MEGA世代あるいは新MEGA段階と指摘し、同時に日本の研究者も新『メガ』の編集・刊行に積極的に働きかけてゆく（『経済』1983.3）べきだとして以来、その服部の指摘が現実のものに成りつつあることを本書は如実に示していると言える。同時に本書およびその基礎となったいわゆる仙台グループの新MEGA編集作業と共同研究とは、共にパソコンという現代の機器がなければおよそ不可能かあるいは極めて大きな困難が伴ったであろうことは容易に見て取れる。

本書はそのサブタイトルにあるように、『資本論』第Ⅱ部の成立過程においてエンゲルス編集原稿に特に焦点を当て、その詳細な成立過程とその学問的位置づけの確定およびそれに基づく新MEGAの独立巻としての収録といったことを中心に論究がなされているが、その事が同時に新MEGAの編集のあり方への新しい提案という意味合いをも持っている。さらに、いわゆるマルクス－エンゲルス問題についてもいくつかの具体的な問題を論究している。

以下行論に即して少し立ち入って内容を紹介すると共にいくつかの問題点なり要望なりを記してみたい。その際、本書は例えば前書きで著者自身によって本書の成り立ちの事情、本書の課題、構成・特徴、といったことが的確にまとめられており、また各篇の冒頭においてもその篇の課題と構成が簡略にまとめられている。さらに、「残された課題と展望」と題する「結論」において本書の到達点と残された課題とが著者自身によって簡潔にまとめられている。読者はそれらを手がかりとして見通しを持ちながら本書を読み進むことが出来るようになっている。本書は極めて専門性の高い著書のゆえ著者によるその様な心遣いは読者にとっては誠にありがたい。

II

『資本論』第Ⅱ巻は周知のように、1883年3月14日マルクスの死後その直後にマルクスによる草稿

が発見され、それをエンゲルスが解説・編集をして1885年7月に初版が発行された。本書の  
序論 対象と問題の所在、

#### 第1章 エンゲルス編集原稿の成立過程とその問題点

において著者はまず1883年3月25日付の書簡から1886年2月8日の書簡まで関連する書簡68通の関連箇所を示すことによって、特に『資本論』第Ⅱ巻およびその準備のためのエンゲルス編集原稿の成立過程とそれに関連する問題点を明らかにしている。著者は『資本論』第Ⅱ巻完成までの段階を次のように整理している。(40p.)

1. 遺稿発見から内容の整理・検討編集方針の確立まで一準備段階、出版契約
2. 編集作業の開始—書写作業の段階
3. 編集作業の第2段階—書写原稿の加工(訂正・削除・追加・翻訳・新挿入・章節区分と表題づけ、など)
4. 編集作業の最終段階—清書、全体の調整、補正的加工、など
5. 入稿、印刷、構成、序文執筆などの追加的作業
6. 完成、献本発送など

このことから知られるように、『資本論』第Ⅱ巻に関連してマルクスとエンゲルスが直接関わりを持ったものとしては、①マルクス自身の残した草稿、②エンゲルスが編集作業のために作成した編集原稿、③印刷するための清書稿、④本として完成した『資本論』第Ⅱ巻初版、⑤同第2版、が存在することになる。このうち本書では上記の第2と第3の段階で作成された「エンゲルス編集原稿」の成立過程、それとマルクスの草稿との関係等を明らかにしてその学問的な位置づけを確定し、結果新MEGAの独立巻として位置づけられるようになった経緯を明らかにすると言ったことが主要な内容となっている。著者自身の言葉でその事を確認すれば次のとおりである。「…本書全体のテーマは「エンゲルス編集原稿」の成立と、そのMEGAによる実現という密接に関連する2つの過程について、それぞれの段階の詳細な経緯とその作業内容を書誌的・歴史的に解明することに絞られる。」(11p.)

また本章ではエンゲルスのカウツキー宛1884年6月21日付書簡で指摘されているアイゼンガルテンの存在と役割に注意を喚起している。アイゼンガルテンはマルクスの草稿をエンゲルスが彼に口述筆記させた人物としてエンゲルスの書簡にその名前が登場するのみであるが、彼の役割は必ずしもそれに止まらないことが本書に於いて掘り起こされている。アイゼンガルテンは急速に独自でマルクスの草稿の解説が出来るようになり、このエンゲルス編集原稿の作成に当たってエンゲルスの協力者として学問上創造的な役割を演じていることが本書で明らかにされている。そのことが「第Ⅱ篇、6章、オスカル・アイゼンガルテンのプロフィルとエンゲルス編集原稿への貢献」において詳細に明らかにされている。

ついでに言えば、本書の第2章の付論で展開されているモスクワにおけるマルクス・エンゲルスの

手稿の解説のエキスパートであった G. コフガンキンについての叙述（83p. 以下）に関しても同様のことが言えるのではないだろうか。「…彼の名前は、どの巻にも載せられていない。その意味でも、ここに彼のノートを取り上げ、その編集史上の位置と意義づけを与えて彼の果たした役割を記録にとどめておくことは、不可欠のことと考えた。コフガンキンは、本当の意味で「縁の下の力持ち」に徹した人物であったといえよう。」（91p.）このように事実上大きな役割を果たしながら、今まで必ずしも正当に評価されてこなかった人物に、温かいまなざしを持って改めてスポットを当てているというのが本書の特徴の一つといえよう。

序論のⅣ. 『資本論』第Ⅱ部刊行の同時代的背景 においては、同巻の発行が急がれた時代背景が確認されている。1883年3月に遺稿が発見され1885年7月にそれが本となって刊行されている。驚くべき早さと言わざるを得ない。この刊行を急いだ事情とは、主に、既に第3版を数えていた『資本論』第Ⅰ部にたいする非科学的な世間の対応が上げられる。例えば、ファウファー、ブレンターノ、ロリア、ロートベルトス等。著者は「しかし、第Ⅱ部固有の理論内容との関わりという点に絞ってみると、そこには、直接に出版を急がねばならない当時の論争的課題があったとはいえず…。『資本論』第Ⅲ部の刊行を急ぐために、まず第Ⅱ部を片づける、という意図が働いていたことも、否定できない。」（55p.）と結論づけている。

### Ⅲ

#### 第1篇 エンゲルス編集原稿の位置づけとMEGAへの組み込みの経緯

##### 第2章. MEGA編集構想の中でのエンゲルス編集原稿の位置づけ

##### 第3章. MEGA<sup>2</sup> II / 12, 13巻の日本における編集の引き受け

##### 第4章. エンゲルス編集原稿をMEGA<sup>2</sup> II / 12として独立の巻に収録することの意義

エンゲルス編集原稿の位置づけはその内容如何である。したがって、その内容が明らかになるにつれてその位置づけも固まって来るという関係にある。以下行論に従って本書での展開をまとめると次のようなことになるだろう。

このエンゲルス編集原稿を新MEGAの独立巻として公刊すべきだという考えに至ったのは1980年代の後半である。モスクワで新MEGA第Ⅱ部の編集を中心的にになっていたヴィターリ・ヴィゴツキーとラリーサ・ミシュケーヴィチがアムステルダムでオリジナルの調査を行い、さらに「アレクサンドル・チェプレニコが調査を行った後にはじめて、このエンゲルス編集原稿もMEGAで公刊すべきだという考え方に到達した。」（70p.）一方、ベルリンのフォルグラーフ／ユングニッケルは「MEGA<sup>2</sup> II / 12 不要説」を唱えていた。この両者の違いはエンゲルス自身に対する、あるいは『資本論』第Ⅱ部と第Ⅲ部の編集に関してエンゲルスの果たした役割に対する、評価の違いを基礎としている。1994年末から1995年2月にかけて集中的に開催されたMEGA第Ⅱ部門の編集委員会においてエンゲルス

編集原稿を MEGA<sup>2</sup> II / 12 として『資本論』第Ⅱ部初版を MEGA<sup>2</sup> II / 13 として刊行することが決定され、とくに MEGA<sup>2</sup> II / 12 の編集にはモスクワのヴァーシナが当たることが決められた。

1990年代半ば頃から、一方でモスクワにおいてマルクス・エンゲルス研究が極めて困難になったこと、特に中心メンバーであったヴィゴツキーが病に倒れる（1998年死去）という事態に直面したこと、他方で日本におけるマルクス・エンゲルス研究の水準の高さが国際的にも認められるようになったこと、この両方の条件が相俟って1998年1月に日本 MEGA 編集委員会が発足し、その一環として仙台グループが組織されそしてそこが MEGA<sup>2</sup> II / 12, 13 の編集を引き受けることとなった。仙台グループには当初大村泉（東北大学）、宮川彰（都立大学）、柴田信也（東北大学）、市原健志（中央大学）、大野節夫（同志社大学）、八柳良次郎（静岡大学）が参加し、1998年8月本書の著者である早坂啓造が加わった。さらに2002年5月に守健二と久保誠二郎が参加した。

もちろん、これら一連の動きの前提条件として1990年ドイツ民主共和国の消滅と1991年のソ連邦の解体という世界史的激変があり、その結果それまで新MEGAの編集刊行を担ってきた基盤がなくなり、かわってIMES（国際マルクス・エンゲルス財団）が設立され、その事業を引き継ぐことになるという大きな流れの変化があったのは自明のことである。

エンゲルス編集原稿を新MEGAの独立巻として刊行するための編集作業は、モスクワにおいてある程度進んでいた。そしてその成果を仙台グループが引き継いだ。それは、エンゲルス編集原稿のオリジナルのコピー、同解説ファイル化原稿、『資本論』第Ⅱ部初版および第2版コピー、さらにヴィゴツキーの作成した「成立と伝承」、「典拠に関する記述」を含むものであった。「成立と伝承」と「典拠に関する記述」（76p.以下に全文訳出）とはMEGA<sup>2</sup>全体においてアパレート巻の重要な部分を構成するもので、モスクワでの編集作業の進捗状況を示す材料の一つとなる。ちなみに、MEGA<sup>2</sup>においては全ての巻がマルクス・エンゲルスの手がけたものを収録する本巻と解説編集等の中で明らかになった事柄を記載するアパレート巻（編集上の考証資料）のセットとして作成され配本されている。

ところが、仙台グループによる編集作業が進められる中で、1998年秋に助言と協力を行っているロルフ・ヘッカーから仙台グループにたいして覚え書きという形で問題提起がなされた。要するに、エンゲルス編集原稿、『資本論』第Ⅱ部初版・同第2版の間には大きな移動・差異が見られない。従って、「エンゲルス編集原稿と印刷本とが、MEGAの2つの巻として編集されるべきかどうか？」（111p.）というものだった。そして仙台グループは一度このヘッカーの提案を受け入れる。そして1998年11月27日アムステルダムで開かれたIMES編集委員会にMEGA<sup>2</sup> II / 12と13を合巻とするという提案を行う。しかしながら結論は持ち越された。その後、仙台グループとして独自に内容の検討を行った結果、1992年2月来日したヴァーシナとの議論を経て、仙台グループとしては先のIMESへの提案を撤回して、最終的にエンゲルス編集原稿と『資本論』第Ⅱ部初版とを別々の巻として編集し、アパレート巻は両巻共通のものとするという案に落ち着いた。（114 - 123p.）そして著者は仙台グルー

プの代表である大村泉がまとめた新 MEGA 第Ⅱ部第 12 巻：エンゲルス『資本論』第Ⅱ部編集原稿（1884 - 1885），に盛られるべき内容として次の諸課題を掲げている（123p.）。

- (1) 編集原稿内異文一覧
- (2) 編集原稿作成過程一覧
- (3) 編集原稿編集者訂正一覧
- (4) 編集原稿とマルクスの諸草稿との対応関係一覧
- (5) 編集原稿のマルクス諸草稿からの乖離一覧

さらに著者としては新 MEGA の他の諸巻とは際だった本巻独自の課題として，(4) と (5) を十全な形で提供すること，そして「この編集原稿の形成に直接関わった人物のプロフィルの掘り起こし・解明と共に，彼がどのように関わったかを，復元すること」（123p.）としている。

#### IV

##### 第Ⅱ篇 エンゲルスによる編集過程の諸問題

###### 第 5 章 エンゲルス編集原稿における「二重のページづけ」と編集作業の諸段階

###### 第 6 章 オスカル・アイゼンガルテンのプロフィルとエンゲルス編集原稿成立への貢献

本篇は先にあげた新 MEGA 第Ⅱ部第 12 巻の課題のうち (2) 編集原稿作成過程一覧，アイゼンガルテンについて述べられている。

エンゲルスはマルクスの遺稿発見の直後から，とにかくその全体に目を通した上でどのように編集すべきかの方針を打ち立てた。そして，1884 年 6 月以降アイゼンガルテンに口述筆記をさせた。ところがそれは，とりあえずマルクスの遺稿を誰でもが読める形に最初から順を追って清書するという単純なものではなく，すでにエンゲルスの頭の中にあった構想にもとづいての編集作業の一貫としての口述筆記作業であった。そしてアイゼンガルテンはその熱心さと学識および印刷工としての経験等から，比較的早期に独自にマルクスの草稿を解読できるようになったのである。これらのことからエンゲルス編集原稿に何種類かのページづけのあるものが見いだされることになるのである。エンゲルスとアイゼンガルテンとの筆跡の違い，またそこで使われている紙質の違いを考慮することを含めて，それらの事がエンゲルス編集原稿がどのように作成されたのかをわれわれに伝えることになっている。特に第 5 章においてその事が詳細に述べられている。また，その過程においてアイゼンガルテンがどのような役割を演じたのかも推定できるのである。本書執筆時点において著者は「…アイゼンガルテンの様々な専門技術や学識能力の蓄積から見て，一部の翻訳や要約などの，内容に関わる編集作業にも参画していたのではないかと，という有力な見解も一部には出ており」（172p.）としている。

## V

## 第Ⅲ篇 エンゲルス編集原稿の内容上の諸問題

第7章 「異文一覧」と「乖離一覧」との組み合わせから見えてくるもの

第8章 エンゲルスによる「流通資本 Cirkulationskapital」カテゴリーの設定

第9章 『資本論』第Ⅱ部第3篇の表題をめぐって

本篇の内容は仙台グループによる、エンゲルス編集原稿を新MEGA第Ⅱ部第12巻に収録するための編集作業から得られた直接的な成果といえる。

エンゲルス編集原稿が作成される過程を再現するために、まずエンゲルスはマルクスの遺稿からどの部分を取り入れて原稿を作成したのかという「採用個所一覧」(本書付表2-a)が作られた。そして、その際にエンゲルスの手で変更された個所、つまり「誤記訂正・削除・挿入・要約など」(186p.)を一覧化した「乖離一覧」(本書付表2-b)が作成された。さらにエンゲルス編集原稿の内部で行われた「一切の変更―誤記・削除・挿入・翻訳など―やテキスト外の編集上の指示(「改行!」,「注へ!」,「〇〇ページへ!」など)を拾い出し、その変更の種類や、プロセスを示す様々な記号を用いて記録した一覧表」(184p.)を「異文一覧」として作成した。「異文の数は、合計7000余に達した」(185p.)というようにそれは膨大な量にのぼった。曲折を経た結果これら「採用個所一覧」と「乖離一覧」が新MEGAのアパート巻に採録されることは「MEGA編集の歴史に画期的」と評されることである(191p.)。このような作業を通して「エンゲルス編集原稿の精密な成立過程の全体像を復元すること」が出来るのである(190p.)。第7章ではこれらの作成の経過がいくつかの具体例を示しながら詳細に示されている。

第8章においては、流通資本:Cirkulationskapital, がエンゲルスの作り出した術語であることが、「乖離一覧」作成過程から明らかになったことが詳細に述べられている。マルクスは、cirkulierendes Kapital という語を①社会総体の資本の運動を意味する場合、②生産資本と区別された、資本の本来の流通部面でとる姿態、すなわちエンゲルスが流通資本(Cirkulationskapital)と名付けた意味、③固定・流動の流動に相当する意味、の三様に区別して使っていたが(229-232pp),「マルクスの用法が見過ぎせない混乱に導くことを恐れた」(228p.)エンゲルスがその様な語を造って違いを明瞭にし、混乱を回避した。

現行版『資本論』第Ⅱ部第3篇は、「社会的総資本の再生産と流通」という表題を持つ。この表題はエンゲルスによるものである。マルクスはこの第3篇に相当する第Ⅱ草稿に「流通過程と再生産過程の実在的諸条件」という表題をつけている。本書第9章においてはこのエンゲルスによる表題づけが論究されている。マルクスによる「実在的」という語の用例を洗い出し、それを検討することを通して著者は、「…エンゲルスの「社会的総資本の再生産と流通」という表題づけを見れば、それは少なくとも不当、誤りということは出来ないばかりか、第3篇総体に盛り込まれている内容をむしろ適切に

集約して表現しているとして、積極的に評価してよいとさえいえよう」（270p.）と結論づけている。

#### 結論 残された課題と展望

#### 第10章 「マルクス—エンゲルス問題」との関わり

この部分は本書全体の総括に当たる。著者は、新MEGA第Ⅱ部第12巻の『資本論』第Ⅱ部のためのエンゲルス編集原稿を編集する作業の意義をここで改めて確認している。（275p.）さらに、マルクス—エンゲルス問題については「マルクス／エンゲルス間の乖離」を、網羅的に事実として捉え、比較検討のための基礎資料としてまず確定することであろう。（280p.）、とまずは「そうした土俵を」敷くことが先決であるとしている。

## VI

### いくつかの論点について

- 1 エンゲルス編集原稿を、その内容の検討を通して新MEGAの独立巻として刊行することの意義は極めて大きいといえよう。
- 2 それの編集作業を担った仙台グループの功績もまた高く評価されるべきである。それはマルクス—エンゲルス研究の国際的な広がり視野に入れてそう言えるであろう。
- 3 特に新MEGA第Ⅱ部12巻において「採用箇所一覧」、「乖離一覧」、を採用・公刊することは、これまでの新MEGAの編集のあり方に対する新たな提案という意味を持っている。これらによって読者にとってはマルクスの遺稿と現行『資本論』第Ⅱ部との関連を十分に知りうると同時に、エンゲルスが遺稿からそれを『資本論』第Ⅱ部にまとめるために行ったことが逐一明らかになる。これはいわゆるマルクス—エンゲルス問題を考える上で大きな意味を持つ材料を提供することになる。この刊行自体が「マルクスとエンゲルスの「対等」の扱いにある」（73p.）とする「MEGA編集要項」の基本的な立場を堅持したものであるという意味合いで、マルクス—エンゲルス問題に対する一定の立場の現れであると考えられなくもない。
- 4 例えば、マルクス—エンゲルス問題の一つとして、マルクスの死後遺稿の中から『資本論』第2部と第3部の草稿が「発見された」、すなわちエンゲルスはマルクスからこの草稿に関する情報を得ていなかったのはなぜかという、疑問があるが、本書28ページのエンゲルスからベーベルにあてた1883年8月30日の書簡がこの問題の一つの手がかりになるであろう。エンゲルスはそこで次のように述べている。「どの程度まで仕上がっていたかがこの僕にまで隠されていたのは、いったいどういうわけなのかと君は尋ねる気かい？答は簡単だ。もし僕が知っていたら、それが全部でき上がって印刷されてしまうまで、僕は彼に夜も昼も寸時の休息もあたえなかつただろう。そして、マルクスはそれをほかのだれよりもよく知っていた。」エンゲルス自身のこの言葉を額面通り受け取っていいかどうかは疑問の余地が残るといえよう。

5 本書は日本メガ編集委員会の仙台グループのメンバーとして参加した著者が、グループ内での分担作業を遂行する中から生まれた著作である。そのことはまた、新MEGAの編集・刊行事業の主体がIMESに移ってから「国際化」が基本的考えとして堅持されているが、その様な流れの中に位置づけられるものでもある。本書は、グループ内はいうまでもなく、日本のみならず特にモスクワ、ベルリン、アムステルダム、等の研究者・研究機関との連携と協力の産物である。仙台グループのその他のメンバーにあってもこのプロジェクトの中での役割に応じたそれぞれの成果の発表と、プロジェクト全体の活動の全容もいずれ明らかにされるときが来ることを期待したい。一方また、本書が第一次MEGA事業の継承でもあるという意味合いも指摘しておきたい。

6 著者は、MEGA編集事業そのものの歴史の記録(277p.)に関心を示している。本書が新MEGAの編集・刊行の歴史に関する記述そのものでもある。

新MEGAの歴史を見るときは当然のことながら、ドイツ民主共和国とソ連邦が主体であった時代と、IMESの時代とを峻別する必要がある。本書ではその辺の事情をもう少し強調されてもよかったのではないかと考える。著者はマルティン・フントの次のような言葉を紹介している：「新『メガ』はそれ自体が、その本質からしてきっぱりと反スターリン主義的なものであった」が、「スターリニズムの克服を中途半端にしか考えなかったこと」もあって、その相反する潮流の間で「1989年の秋まで途絶えることなく続いてきたし、また大半が水面下で行われた闘争の、はっきりした痕跡をとどめている」(71p.注82)、と。一般論として、「新『メガ』はそれ自体が、その本質からしてきっぱりと反スターリン主義的なものであった」と言えるかもしれない。すなわち、マルクスとエンゲルスの業績が網羅的に公刊されるということは、マルクスとエンゲルスを恣意的に解釈するという可能性がずいぶんと狭められるであろうからである。しかしながら、ドイツ民主共和国とソ連において、学問の分野においてもスターリン主義的な傾向があったことは事実として確認しておく必要がある。新MEGAの事業も党および国家の事業であったのである。学問分野にもいわば公式見解があり、自由な議論が保証されていたとは言い難い。マルティン・フントの言葉を引けば「党と結びついた編集…とりわけ〔この党が〕支配政党である限り、その党派は自らの日常の政治的利害を学問上の仕事にも持ち込もうとします。」(マルクス・エンゲルスマルクス主義研究第12号、4ページ)マルクス-エンゲルス問題がそのよい例である。かつては一体説しかありえなかった。また、ドイツ民主共和国とソ連との関係についても、学問的な議論の中に党および国家のいわば力関係が直接持ち込まれるということがあったことは筆者がその当事者達から聞いた話である。

7 本書を読むにつけて『資本論』第Ⅱ部関係の草稿類をMEGAの諸巻として早く手にしたいものだという気持ちがますますわき上がってくる。

『資本論』第Ⅱ部の草稿のうち第一稿はすでに新MEGA第Ⅱ部第4巻第1分冊として既刊である。第三稿と第四稿が同第3分冊として、第二稿と第五稿から第八稿までが同第11巻に収録され



ることになっており、それぞれ編集作業はほぼ終わっている。本書が扱っている同第12巻と合わせてそれらを手にしてエンゲルス編集の『資本論』第Ⅱ部と比較検討するとき、本書がたよりになるナビゲータの役割を果たしてくれることは間違いない。

- 8 筆者はすでに本書の書評を経済理論学会の機関誌：季刊経済理論に投稿している。8月24日付 e-mail で、編集者から審査の結果同誌41巻第4号に掲載される予定である旨の連絡を受けた。しかし、同誌の書評は6000字という字数制限があり、必ずしも十分意をつくしたものになっていないと感じていた。そこで今回本学の紀要に改めてより詳細な内容の書評を掲載することにしたものである。
- 9 さらに、本書の書評は雑誌『経済』の2004年8月号に赤間道夫氏によるものが掲載されている。本文3000字弱という字数にも関わらず、コンパクトに要領よくまとまった書評となっている。

(2004.9.28.)